

報告

電子化により資料の利用可能性を拓く

—地域史編さんから文書館へ—

福井県文書館 柳沢芙美子

はじめに

福井県文書館は、2003年（平成15）2月に開館した新しい施設である。館が収集・保存する文書館資料としては、多くの先行館と同様に、「公文書」（福井県の公文書の中から歴史的に価値のあるものを選別・収集した資料）と、「古文書」（地域資料）の双方を対象としている（「福井県文書館の設置および管理に関する条例」）。

しかし収蔵資料の内容を具体的にみてみると、かなり特徴的なものになっている。まず戦前期の福井県公文書は、福井空襲、1948年（昭和23）の福井地震とその後の水害などによって多くが失われているため、公開している公文書約3800冊（3万1000件）の8割は1960年代以降の比較的新しいものである。くわえて古文書においても、1978年（昭和53）から開始された福井県史編さん事業において調査・撮影されたマイクロフィルムによる複製資料が大半を占め、開館以降の寄贈・寄託によって原本の蓄積は徐々に増えているものの、公開13万件のうちわずか3%に過ぎない。

こうした収蔵資料の蓄積の少なさ、大半が複製という問題点は、資料のストックの規模が重要となる文書館施設として準備段階からある程度認識されていた。これを補うために、また、複製であってもその資料情報の提供・検索の側面では、ある程度の規模をもちうることから、資料情報の蓄積とその提供の仕方、とくにインターネット上での情報提供を重視して準備が進められてきたといっている。しかしながら、豊富な画像データを提供するいわゆる「デジタルアーカイブズ」の必要性までは予算的に認められなかったため、あくま

でもデータベースはテキストを中心としたものであり、画像の提供は量的に制約のあるものとなっている。

併設館の福井県立図書館には年間63万人（2004年度）ほどの来館者があり、さいわい併設の当館へ何気なく訪れる県民の方は少なくない。またロボット型の検索エンジンの普及によってインターネット上から当館のWebページを閲覧する方も少なくなく、1日あたり約2000ファイル（html・pdf）が閲覧されている。このような一般の利用者にとって、文書館資料が公文書・古文書（地域資料）にかかわらずなじみが薄く近づき難い側面をもっていることを考慮し、より利用しやすい資料情報・目録の提供、資料の利用可能性をひろげる様々な手立てが求められているといえよう。

ここでは、こうした課題へのひとつの試みとして、当館のWebサイト運営、資料群の情報を含む目録データベースの整備、県史編さんの成果をいかした職員による刊行物の電子化・一部資料の全文テキスト化など、開館3年をむかえた福井県文書館のインターネット上での情報提供の現状と問題点について報告したい。

なお、当館の設立にいたる経緯については、平野俊幸「福井県文書館の設置経過について」（『記録と史料』12、2002.3）を、2005年2月段階のWeb上の情報提供への評価については神田竜也「福井県文書館ホームページの評価」（『福井県文書館研究紀要』2、2005.3）を、それぞれ参照いただきたい。

また、本報告の配布資料「都道府県・政令指定都市等の文書館Webページにおける情報提供」は、加筆して『福井県文書館研究紀要』

3 (2006.3刊行) に掲載予定である。

1 インターネット上での情報提供の概要

Webサイトを開いた際に最初に表示されるトップページでは、できるだけ画面をスクロールさせない状態で、館が提供している情報を一覧できるように配慮している。福井県文書館の構成は以下のとおりである (URL; <http://www.archives.pref.fukui.jp>参照)。

(1) 「ようこそ! 福井県文書館へ」

(2) 「利用案内」

開館時間、休館日、利用について、研修室について、交通案内、文書館周辺地図、所在地、無料バス案内、開館日カレンダー、研修室利用申請書(pdf)

(3) 「収蔵資料の概要」

歴史的公文書、古文書 (地域別資料群数、古文書目録活用のために、寄贈・寄託資料群一覧)、行政刊行物

(4) 「目録データベース」

公文書・古文書・行政刊行物・写真・県報・新聞記事

(5) 「デジタル歴史情報」

『福井県史』通史編全6巻、図説、年表、統計編、古文書全文テキスト、閲覧室展示、講座

(6) 「お知らせと更新履歴」

(7) 「Q&A」

(8) 「出版物」 (html, pdf)

利用案内、文書館だより、福井県文書館年報、研究紀要、資料目録、資料叢書、文書館新聞、閲覧室展示パンフレット

(9) 「条例・規則等」

(10) 「サイトマップ」

(11) リンク (福井県立図書館、国立公文書館 (都道府県・政令指定都市等文書館)、福井県、e漢字、UNESCO Archives Portal)

他館にも共通する (2) 「利用案内」・(3) 「収蔵資料の概要」といった基本事項のほか (4) 「目録データベース」や福井県史編さんによる刊行物を活用した (5) 「デジタル歴史

情報」を提供している。

当館のインターネット上での情報提供を含むシステム開発については、2000年 (平成12) 5月から7月にかけて公募型プロポーザルが行われ、開館までの2年半の間に、文書館資料の管理と一般利用者への目録データベース・資料情報の提供のためのシステムが整備された。システム自体は、県庁内LANの中にあり全庁の各種システムと端末を共有する業務系と、インターネット上への情報提供を行う公開系から構成されている。

目録データベースへのデータ入力、古文書については県史編さんの過程で1988年秋ごろから「桐」を利用して仮目録を作成してきており、これを準備段階でMicrosoft Accessに移行し、さらに開館時に開発業者に委託して現システムに移行した。

これ以外のコンテンツはすべて、ホームページ作成ソフト、OCRソフト、スキャナ等を利用して、職員が手分けして作成したものである。県史編さんの刊行物をデジタル化するにあたっては、「明らかな誤植、誤りを訂正する以外は、可能な限り刊行本の情報に忠実に本文を文字コード化し、図・表・写真をデジタル画像化する」という方針で作業し、執筆者 (著作権者) や写真提供機関の許諾を得た。一部の写真については、当該機関のサイトへのリンクに変更したものや、掲載料のかかるものについては掲載を断念したものもあった。

こうした作業は県史編さん事業の終了から文書館開館までの準備期間が約5年間と比較的長かったことで可能になった側面と、コンテンツの作成までを業者委託することが難しい予算上の事情の両面からきたものといえる。

また印刷組版の上でも1990年代に入って活字からコンピュータによる「電算写植」に移行しており、この時期に刊行された『福井県史』通史編全6巻、年表等をテキストデータでも受け取っていたものが活用できた。ただ

受け取ったデータには、書式などの機能文字列が大量に含まれており、これをはずす作業にも労力を割くことになったが、結果として職員がコンテンツ作成のノウハウを培う機会になったと思われる。

2 基本的な検索手段としての

目録データベース

文書館のWebサイトでの情報提供において中心となるのは、やはり文書館資料の検索ツール・目録データベースであろう。当館においても公文書・古文書・行政刊行物のそれぞれの文書館資料について、キーワードから主要な項目に検索を行う「簡易検索」と、データベースの項目に即して検索ができ、表示配列が選択できる「詳細検索」を用意している。後発館の利点として、基本的に公開している資料目録はすべてWeb上からも検索できるため、来館前の予備調査が可能となっている。利用制限のある資料についても目録には掲載されている。

古文書については、県史編さんでは資料群によっては部分的な調査しかできなかった場合も少なくなかったため、仮目録を点検する際に編さん日誌・目録カードなどの業務上の記録を確認し、調査・資料整理の経緯、資料群の成立・蓄積・管理に関する情報を整理して資料群目録を整備した。所在が確認されながら撮影できなかった否撮資料の有無については資料群目録の「概要」の項目で触れている。(3)「収蔵資料の概要」には、こうした古文書の調査経緯に留意して利用いただくために、「目録活用のために」がリンクされている。また、ほとんどの資料群がマイクロフィルム・複製本(開館後に受け入れたものは、デジタルデータも)など複数の媒体をもつため、そうした複製情報も作成している。

こうした資料群目録の整備は、一般利用者に大半が複製資料という当館の特別な事情を理解してもらうためだけでなく、文書館資料の特性を理解してもらうためにも重要なも

のであると考えている。

データベースの今後の改善点としては、すでに画面遷移や検索上、多くの使いにくさが生じている。インターネットの検索エンジンの使い勝手が標準化するなかで、ブラウザの「戻る」ボタンで前の画面にもどれない、キーワードの「AND検索」にスペースが使えない、といった使いにくさは、一般の利用者にとってはけっして些細なものではないと思われる。

また古文書のうちおおむね1600年(慶長5)までの資料約3300点について、「古文書資料目録」の詳細画面で、目録情報とともに全文テキスト・画像(モノクロ、jpeg)を表示するようになっており、テキストは「デジタル歴史情報」のフリーワード検索の対象ともなっているが、開発当初から本格的な画像提供を想定していなかったことから、こうした情報があることがわかりにくい構成になってしまっている。

さらにデータベース自体、追加情報がわかりにくいという問題がある。このため、いわゆる「新着情報」でデータベースへの資料追加を知らせるといった図書館では一般化している情報提供も不可欠であろう。当館ではこれまで(6)に含まれる「更新履歴」でデータベースへの追加情報を提供してきたが、あまりわかりやすい示し方ではなく、目録データベースの画面にもこの案内が必要だろう(改善済)。

またこれに関連して館の収蔵資料全体を簡潔に的確に概観するための(3)「収蔵資料の概要」の充実がもとめられている。その意味で当館の簡素な収蔵資料の概要は、館の研究蓄積の浅さを如実に反映したものであるといわざるをえない。

すでに神田論文でも指摘されているが、キーワードによるデータベース検索を中心とした設計になっているため、文書館資料の全体像がわかりにくい。国立公文書館・沖縄県公文書館・山口県文書館などで可能になっている「階層検索」(ディレクトリ検索)と同様な方法で、たとえば古文書では、資料群を地

域別にブラウジング（拾い読み）できる画面を自動的に生成するシステムあればより使いやすくなるだろう。公文書では、この階層検索のための前提として福井県庁文書の文書管理史、機構の変遷、各課の事務分掌等について研究を蓄積することがもとめられている。

自治体文書館においても近年、インターネット上で目録を提供している施設が増えており、本報告時の調査では46館中15館（約3割）がなんらかのかたちで資料情報のデータベースを公開していた。こうした中で、その使い勝手や、共通して提供すべき文書館資料の情報要素やその表示方法などについて、率直な批評や議論がかならずしも十分になされているわけではないように思う。その背景には公共図書館のようなパッケージソフトが普及していない自治体文書館にとって、検索システムの開発やその修正も予算的な制約からまなならない事情もあり、改善すべき課題はみえていても容易に実現が困難な現実がある。

3 文書館資料の利用可能性をひろげるために

開館後に、当館のWebサイトのアクセス状況をみて意外だったのは、Googleなどの検索エンジンを利用して、直接キーワードが含まれる下位の階層のWebページにやってくる利用者が多いことであった。当館Webサイトには現在約3700ファイル（html・pdf）が掲載されており、アクセスの約8割を福井県史関係の刊行物（約3500ファイル）が占めている。

指定したキーワードで全文検索を行うことができるGoogleのような検索エンジンの普及によって、極端ないい方をすれば、独自にデータベースを用意するよりも、html・pdfファイルで提供したほうがはるかに一般利用者の関心に触れやすくなったともいえる（もちろん複雑な条件での絞り込みや並び替えができ、データの修正・追加の容易なデータベースの利点は大きいのだが）。

このことは、予算規模の小さい自治体文書館

においても、低価格で迅速に様々な資料情報を提供できる可能性がでてきたといってもいい。

ただ資料情報の提供にあたって留意したい点として、全史料協の場で改めて発言する必要がないほどに自明のことであろうが、単なるアクセス数の向上や掲載情報の量的な拡張のみを求めるのではなく、典拠のある情報、典拠となる文書館資料を参照できる情報提供のあり方が重要だろう。検索エンジンによってほとんど偶然にやってきたWebページ閲覧者が、さらに踏み込んでサイトのあちこちを閲覧し、また再度訪問する本格的な利用者となるかは、そのサイトの基本的な資料提供のあり方、その提示方法の工夫とその蓄積にかかっているのではないかと。

通史や年表などの刊行物は典拠となる資料（群）が示されているという意味で、また一定の校正を経ていることで比較的質の高い情報となっていると思われる。

また、神田論文では「（文書館の展示スペースの）限界を克服する手段として収蔵資料をデジタル化し、テーマを決めてホームページ上で公開」してはどうかという提案がなされている。具体的な文書館資料への関心をおこす方法として、テキストや画像といった電子化した資料情報の提供、実際に行われている展示や講座をもとにした資料情報の提供も館業務全体のバランスのなかで進められるべきだろう。Webサイトは、文書館資料の目録データベースへの追加、講座・展示などの行事、出版物などの情報が随時追加・蓄積されることで文書館の活動全体の記録ともなる

なお、目録については、すでに秋田県公文書館（pdf）、東京都公文書館（pdf・html）、鳥取県立公文書館（html）、大分県公文書館（html）、川崎市公文書館（xls）、名古屋市政資料館（xls）、板橋区公文書館（pdf）、京都大学大学文書館（xls・pdf）などで目録が掲載されており、このように一般に入手しにくい文書館の資料目録がインターネット上に掲載される利点は大きい。